

# 2014年度関西英語教育学会（第19回）研究大会 概要

6月8日（日）
10:00～11:40 研究発表・事例報告（① 10：00～10：30 ② 10：35～11：05 ③ 11：10～11：40）
<b>【第1室】 ① [研究発表] わかりおモデル：英語音声指導の新しいアプローチ</b> 秦 正哲（兵庫医療大学）
本研究の目的は、英語発音記号に分かりやすい呼称を付けることに基づく英語音声指導モデルを理論的に提示することである。多くの場合、日本語を第1言語とする英語学習者にとって、通用性の高い英語発音を習得することの試練を克服することはこれまで困難であった。その困難さの一因として、英語においては、単語の綴りがその単語の音声を知る手がかりとして機能する効果があり高くないことが挙げられる。そのため、これまで英語指導において、英語における単語の綴りと音声との間の隔たりを克服するために、発音記号を指導することが行なわれてきた。しかし、英語発音記号には分かりやすい呼称が付けられてこなかった。そのため、英語発音記号に分かりやすい呼称が付けられていないことが、英語音声の指導および習得を困難なものとしてきた一因であると考えられる。このように考えると、英語発音記号に分かりやすい呼称を付けることに基づく英語音声指導モデルを確立することにより、英語音声の指導および習得をより効果的なものにできる可能性がある結論づけられる。
<b>【第1室】 ② [研究発表] 英語絵本を導入した初等英語教育教員養成プログラム開発についての研究</b> 脇本 聡美（神戸常盤大学・兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生）
イーガンは、物語、イメージ、対概念、比喩、冗談、韻・リズム、生きた知識といった話しことばに関連する認知的道具（イーガン、2006）や身体を使った理解（イーガン、1997）を通じて、学習者の感情や想像力に働きかける教育の重要性を提唱している。本研究の目的は、イーガン(2006)の提唱する教育の枠組みにもとづいて、小学校教員養成課程の授業をデザインし、学生の初等英語教育に対する理解や認識の変容を明らかにすることである。具体的には、2013年10月～2014年1月にかけて発表者が担当した授業で、発表者が、イーガンの研究の枠組み(イーガン、1997、2005、2006)について講義したのち、学生たちが、認知的道具を意識しながら、英語絵本を教材とした英語活動の開発に取り組み、発表した。実践の開始時と終了時に行った「英語学習と英語絵本に関する質問紙調査」とともに、グループワークで活動中の学生の音声データ、活動の発表、授業後に課したレポートの分析より、英語絵本を教材とした授業を体験し、自ら作成することで、学生たちが、初等教育の英語学習における認知的道具の概念や想像力の重要性に対して意識を高めたことが明らかになった。
参考文献 Egan, Keran. (1997). The Educated Mind: How Cognitive Tools Shape Our Understanding. U of Chicago P. Egan, Keran. (2005). An Imaginative Approach to Teaching. San Francisco : Jossey-Bass. Egan, Keran. (2006). Teaching Literacy. California: Corwin Press.

## 2014年度関西英語教育学会（第19回）研究大会 概要

### 【第1室】③ [研究発表] 英文法指導に関する教員意識

－中学校教員と高等学校教員の比較－

神山 豊彦（五條西中学校）

本研究では、学校現場における文法の捉え方とその教授方法について、中学校英語教員と高等学校英語教員の意識を検証し、比較を行った。研究方法は、中学校英語教員205名と高等学校英語教員132名に対しての質問紙調査と、その後の中学校英語教員5名と高等学校英語教員5名へのフォローアップインタビューと授業観察である。分析方法は、t検定と修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチを用いた。その結果、『文法そのものに関すること』、『文法教育に関すること』、『学習方法に関すること』の項目において、中学校英語教員と高等学校英語教員に共通のビリーフが見られた。また、『文法そのものに関すること』、『学習方法に関すること』、『生徒に関すること』の項目に、中学校英語教員と高等学校英語教員に異なるビリーフが見られた。英語教員の文法に関するビリーフが大きく異なれば、生徒が高等学校に進学した際、戸惑いが生じる可能性がある。英語教員が自らの授業を振り返り、授業改善を図る際の一助になることを願い、研究結果を発表する。

## 2014年度関西英語教育学会（第19回）研究大会 概要

【第2室】① [事例報告] 英語自主学習施設の効果  
山岡 賢三（樟蔭学園英語教育センター）

筆者が所属する樟蔭学園英語教育センターは、英語の中高一貫教育を実施し、学生・生徒の英語力の向上に寄与することを目標に、平成21年に設立された英語学習施設である。そこには様々な英語関係の図書や教材・DVD、自学自習ができるパソコンブースがある。放課後にはネイティブが常駐していつでも英会話ができる。そこに来れば、学生・生徒たちが自主的に、または偶発的に学習意欲を喚起し、自らの英語力を向上させることができる。研究の目的として、英語教育センターのような学校の授業以外の自主学習施設が学生・生徒の英語学習に大きな効果をもたらすことを明らかにしたい。研究方法としては、平成22年度～25年度の施設利用者数を分析し、施設が学生・生徒に受け入れられていく過程を調査する。また、施設を大いに利用した生徒を対象に、追跡調査し、テストの結果を比較・分析する。研究の結果として、利用者が増加した理由、また、追跡調査した生徒がなぜ成績を伸ばしたのか考察する。

【第2室】② [研究発表] 2014年における「授業で使える英語の歌」  
伊庭 日出樹（兵庫県立淡路三原高等学校）

児童英語教育から中学校での英語入門期では音声に慣れることやリズムの体得を主な目的として英語の歌をしばしば使用する。入門期以降の中学生や高校生では生徒の感性に訴える、発達段階相応の音楽を用いることが望ましい。また、音声面以外にも文法や内容理解など様々な用途で歌を使う。今回の発表では実際の事例をもとに、「2014年の時点でどのような『英語の歌』を使うことができるか」について考察する。井上ほか(2001)『決定版！ 授業で使える英語の歌20』、同(2008)『決定版！ 続・授業で使える英語の歌20』（いずれも開隆堂）という優れた2冊の先行事例がある。この正・続巻は中学・高校の授業で実際にすぐにでも使えるようにロック・ポップス（いわゆる洋楽）を20曲ずつ紹介している。しかし、収められている最新の曲が2006年のDaniel Powter『Bad Day』であり、早8年の歳月が経過した。また、この2冊の著者の世代は1970年代生まれの発表者よりも世代が上である。「我々の世代ならばどの歌を選ぶか」という視点も今回は取り入れる。

【第2室】③ [事例報告] 中学校英語教育の現状と課題について  
－管理職の視点からの提言－  
高木 浩志（宝塚市立宝塚中学校）

現在の中学校英語教育の現状と課題を考えていきたい。これまでは、実践者として考えてきたが、管理職としての視点から、見えてきたことを率直に述べていきたい。小中の連携、ICTの活用、英語での授業、特別支援での英語教育、c a n - d o リスト、A L T との T T、若手教員の育成などのテーマをもとにまとめていきたい。

## 2014年度関西英語教育学会（第19回）研究大会 概要

【第3室】① [事例報告] 生徒の困り感に寄り添う英語指導の手立て～英語とICTと支援教育～  
森田 琢也（大阪府立とりかい高等支援学校）

教室で気になっている生徒は、どのような生徒でしょうか？静かにしなさい、また忘れ物、ちゃんとしなさい、できるくせにまたさぼっている、ノートに板書を書いていない、ヤル気あるのかな、わがままだ、手がつけれない、授業中の空気が読めない...など、これらは、その生徒自身が困っていることなのかも知れません。これらは生徒からのメッセージであり、気になる生徒というのは、気にすべき生徒であることがあります。その生徒が何に困っているのか、その生徒の行動の裏にある背景を知り、生徒の実態を把握することで、指導のヒントをつかめることがあります。支援教育は、決して特別なものではありません。一般生徒にはあると便利な教育であり、支援を必要としている生徒にはなくてはならない教育です。ICTを有効活用しながら、英語教授法と支援教育をコラボし、生徒の目が輝くユニバーサルデザインの授業を考察します。

【第3室】② [研究発表] 英文法指導におけるリメディアルの試み：CLTと伝統的教授法の折衷  
井上 聡（環太平洋大学）

本研究の目的は、学習者の英文法に対する苦手意識を改善し、英語学習への動機づけを向上させる指導法を考案することである。Spiro(2013)の考えに基づき、文法訳読法やオーラルメソッドといった伝統的教授法とコミュニケーション言語教授法の長所を折衷するとともに、金谷(2012)の枠組みを参照し、(1) 簡潔な英語による導入、(2) 日本語による簡潔な明示的文法説明、(3) 機械的ドリル、(4) コミュニケーション活動を組み込んだ授業を設定し、RQ1英文法に対する苦手意識の変化、RQ2個別の指導法と満足度の関係、RQ3動機づけ項目に対する意識の変化の3点について調査を行った。指導の結果、苦手意識に改善のあとが見られるとともに、「簡潔な英語による導入」と「日本語による明示的文法説明」の2点が満足度の上昇に有意に関わっている状況が示された。また、内発、自律、自己効力感といった動機づけの要素が高められる一方で、関係性への依存度は緩和されることとなった。今後の英文法指導において、苦手意識の改善や自律学習の促進を目指すうえで、過度にAll English、協同学習、タスク等に依存するのではなく、不安を和らげる指導が重要となる。

【第3室】③ [研究発表] 中学1年生を対象としたイメージ利用の基本動詞学習  
ーカードゲーム学習と明示的指導の比較研究から見たことー  
山形 悟史（大阪教育大学大学院）・吉田 晴世（大阪教育大学）

イメージを用いた語彙指導の効果は昨今広く認められているものの、具体的な授業展開に関しては、教員主導の明示的指導に拠るところが大きい。本研究では、日本人中学1年生121名を対象にコアイメージの指導を行った後、1) 各動詞の語義をイメージ化したカードを用いて、カードゲームをした場合、(2) 各動詞の持つ語義を、教員が明示的指導した場合における、基本動詞の習得効果差を比較検証した。2014年2月中旬から3月前半にかけて、1週間ごとに前述のトリートメントを1時間ずつ実施し、それぞれ授業内直後テストと翌々週に行った遅延テストの結果を分析した。結果僅かに、カードゲーム後に行った両テストの平均値が高いことが示されたものの、統計的な有意差は見られなかった。そこで両トリートメントの直後テストを基に参加者を上中下位群に分け、両テスト間での分散分析を行ったところ、すべての群間で有意差が確認された。以上より、イメージを用いた基本動詞の指導は、明示的指導、カードゲームの双方であらゆる習熟度の中学1年生に等しく効果があると同時に、明示的指導に依らずとも、学習者がカードゲームを通してイメージから語彙を学習できることが示唆された。